

評価単位		評価のまとめ
I 保 育 課 程	1. 保育目標	○カリキュラムポリシーが3歳未満児の生活全般を捉えたものになっている。 ○子どもの姿、月、年間評価と反省と照らし合わせ、話し合い、見直しにつなげていく。
	2. 保育課程の編成	○保育指針を基に保育所の特色、子どもの発達、姿に即した保育課程の編成になっている。 ○研究テーマでもある「保育環境(室内・前庭・大学キャンパスとのつながり)」は保育実践が積み重なってきている。 ○保育課程は、引き続き、保護者開示型の写真記録に照らし、実践とのつながりを深めた作成を試みた。
	3. 保育日数・時間	○概ね就労・就学・研究時間に応じた保育時間となっている。就労・就学・研究以外の理由で利用している家庭については、9時～16時の時間を基本とし、冬休み(12/24～1/7)・春休み(3/25～)の期間を設けた。 ○大学内会議などでの延長保育の利用が時々あった。 ○社会状況も考慮しつつ、乳幼児期の成長に相応しい生活リズムを、家庭と連絡を密にし、援助に努めた。
	4. 保育内容と成果	○大学構内で歩く、走る、登る、降りる、跳ぶ等の運動機能の発達を促す活動を積極的に展開した。子どもの人数が少ない時など、安全性が保たれると判断した日には、教育の森公園など、学外への散歩も行い、高低差の多い地面を歩いたり、斜面上り下りなど身体を存分に駆使する経験を重ねた。 ○子どもから生まれる遊びや表現を大切に、日々の保育をした。表現では結果(できあがり)を問うのではなく、何が行われたように表現されたか、室内装飾として楽しむと共に、保護者にも共有できるよ、玄関等に掲示した。お散歩先で子どもたちが拾ってきたものを装飾に飾ることで、送迎時の保護者と子どもの会話のきっかけにもなっている。 ○職員間で日々、こまめにコミュニケーションをとり、保育内容の確認、変更等を柔軟に行った。 ○連絡帳、日誌、雑務に追われ、打合せの時間が取りにくい、極力計画的に短時間で話し合うよう努めた。
	5. 行事	○伝統的な行事を知り、歌や簡単な製作を持ち帰ることで保護者と共有して家庭でも楽しめた。 ○10月に「親子で遊ぼう会」を開催した。11月の大学祭の時には卒園児・在園児の同窓会を開催し、保護者同士の交流の場となった。感染症対策など昨年度の反省をもとに打合せを綿密に行うことで、安心・安全に行うことができた。子どもたちが普段食べているおやつを提供できたこともよかった。 ○保護者と十分にコミュニケーションが図れるように努めた。また、希望者対象で1日一家庭で保育参加を昨年同様実施し、今年度希望は3家庭であった。送迎時の会話により、興味を持ってくださる方もいらした。0歳児だけではなく1・2歳児も、慣れ保育初日に、保護者と共に過ごしてもらうことで、ナーサリーの様子が伝わり、安心感を持たれたようである。子どもにとっても初めての場所で、保護者が一緒にいることで、安心して過ごす第一歩となった。
	6. 研究・研修	○昨年から継続中の前庭研究では、学内の先生や他大学の先生にも来ていただき、学びが多く有意義な時間となっている。保育学会でも環境に関するシンポジウムにて話題提供者として前庭研究の事例を発表した。東京都すくわくプログラムや東京都都市緑化事業の助成金や寄付金をもとに、歩道側の植え込みの植栽を含めた前庭環境を中心とした整備を進めているところである。進捗状況を保護者とも共有する中で、共にこの場をつくる仲間として、楽しみにして下さっている。研究と実践がつながり、子どもの暮らし場、育つ場がよりよい環境となるよう、今後も研鑽を積んでいきたい。 ○園内では、アレルギー対応に関連した学習の機会や窒息・けいれんなど非常時の対応、ノロウイルスに関する再学習の機会を職員全員を対象に数回設けた。 ○附属幼稚園やお茶の水女子大学子ども園との三園合同研究会での語り合いは、子ども理解や保育観にふれ、よい刺激をいただき、明日への活力となる貴重な時間である。大学150周年記念事業の連携企画のお茶大ポケット・ガーデン創生プロジェクトにも3園で参加することができ、ガーデンを巡る中での学生さんとのふれあいもあり、植栽について学ぶこともできるともよい機会となっている。 ○対面・オンライン外部研修に参加した(子どもの文化学校)。東京都認可外施設向けの研修にも参加した。 ○他施設(東京家政大学ナースリールーム、三松幼稚園、素材センターなど)に見学に行ったことを職員間で共有し、よりよい保育環境・保育のために必要なことを語り合い、少しずつ形にしているところである。 ○非常勤保育士を含め、保育を振り返り、研究を積み重ねることの重要性を認識した。
A 大 学 の 保 育 所 と し て	1. 経営・組織	○2016(平成28)年度より利用を内部者に限定して9年目になるが、今年度も希望者全員を入所時期・登園回数いづれにおいても希望どおり受け入れた。しかし、昨今の状況(少子化・待機児童減少)により、教職員や学生の入所者が極めて少ないため、今年度も施設長判断で、文京区在住者を定員の1/3を上限に受け入れている。今年度規約改正をし、2026年4月より学外者料金を再設定し(学内者料金の1割増し)、今年度同様、定員の1/3程度を地域枠として受け入れる。卒業生・修了生等も学内関係者とし、卒業後も安心して研究や就労を続けられるようにした。 ○2-3ヶ月に1度程度、保育時間終了後に非常勤職員も交えての全員職員会議を開催している。子育て中の職員も多いことから、遅い時間の開催は難しく、日中に分散して行うこともある。事務連絡はできるだけ前日や日中に分散で行い、主に保育の話をしてできるようにした。常勤会議やクラス会議などが必要に応じて行いが、都度都度時間を見つけて話せる時間を大切にしたい。今後も、仕事内容の連絡、連携に努めていきたい。
	2. 出納・整理	○昨年同様、非常勤保育士が中心となって経理事務を担ってくれている。年度後半は、主任保育士も事務担当の非常勤保育士も保育に入りながらの事務作業で、なおかつ年度末はさまざまな締め作業もあるが、時間のやりくりを工夫しながら附属学校課のサポートのおかげで何とかこなせている状態である。連携して円滑に行っていきたい。 ○光熱費や食材の高騰や園児数の増加により、削れない出費が増えた。10年もの家電製品が次々と壊れている中、今後の出費も懸念される。今後も運営費の使途についても計画的に進めるよう努めていく。
	3. 施設・設備	○現園舎が約20年となり、乳児保育施設としての不十分さや経年劣化は否めないものの、大学内施設担当に相談して細やかに修理や不具合に応じていただいている。キッチン設備が順番に壊れており、昼食やおやつなど食の提供が危ぶまれることや衛生面での観点からも問題であるため次年度定例予算請求をしているところである。
	4. 健康	○感染症やその他、疾病の発症を防ぐため、大人・子どもの手洗いの徹底、おもちゃの消毒等の基本を大事にすると共に、お便り等で健康に関する情報を載せ、職員保護者の共通理解に努めた。 ○園に看護師がいないが、怪我や病気の時に附属幼稚園の養護教諭やお茶の水女子大学子ども園の施設長・看護師に相談できる環境が本当にありがたかった。都の救命救急訓練に参加している。 ○アレルギー児は月極保育では現在在籍していないが、時間預かりもあるので、アレルギーについての研修を受け職員間で配慮事項を共有している。誤飲誤食の他、窒息がないように日々食事の援助・介助についても共有した。 ○三大食物アレルギー除去のおやつを引き続き実施した。アレルギー児のいない家庭からも好評である。
	5. 安全	○毎月の避難訓練での反省を次に活かし、1歳児2歳児とも訓練が身について保育士の指示に従い、落ち着いて行動している。図上訓練も行うことで備蓄品を確認して必要な物の検計ができた。 ○大きな事故はなかった。軽微な怪我の時も再発防止策を話し合い、全職員の共通理解と環境整備に努めた。学内散歩で棘がささる園児が複数名おり、受診して棘を抜いてもらうことが何度かあった。大学構内の老朽化したベンチ等は施設課がすぐに対応してくださり、大変ありがたかった。今後も安全安心な保育所を目指していく。
II 保 育 所 運 営	1. 経営・組織	○2016(平成28)年度より利用を内部者に限定して9年目になるが、今年度も希望者全員を入所時期・登園回数いづれにおいても希望どおり受け入れた。しかし、昨今の状況(少子化・待機児童減少)により、教職員や学生の入所者が極めて少ないため、今年度も施設長判断で、文京区在住者を定員の1/3を上限に受け入れている。今年度規約改正をし、2026年4月より学外者料金を再設定し(学内者料金の1割増し)、今年度同様、定員の1/3程度を地域枠として受け入れる。卒業生・修了生等も学内関係者とし、卒業後も安心して研究や就労を続けられるようにした。 ○2-3ヶ月に1度程度、保育時間終了後に非常勤職員も交えての全員職員会議を開催している。子育て中の職員も多いことから、遅い時間の開催は難しく、日中に分散して行うこともある。事務連絡はできるだけ前日や日中に分散で行い、主に保育の話をしてできるようにした。常勤会議やクラス会議などが必要に応じて行いが、都度都度時間を見つけて話せる時間を大切にしたい。今後も、仕事内容の連絡、連携に努めていきたい。
	2. 出納・整理	○昨年同様、非常勤保育士が中心となって経理事務を担ってくれている。年度後半は、主任保育士も事務担当の非常勤保育士も保育に入りながらの事務作業で、なおかつ年度末はさまざまな締め作業もあるが、時間のやりくりを工夫しながら附属学校課のサポートのおかげで何とかこなせている状態である。連携して円滑に行っていきたい。 ○光熱費や食材の高騰や園児数の増加により、削れない出費が増えた。10年もの家電製品が次々と壊れている中、今後の出費も懸念される。今後も運営費の使途についても計画的に進めるよう努めていく。

	6. 開かれた保育所	<p>○微音祭に合わせて行ったナーサリー同窓会は、参加者が多く近況報告や子育ての情報交換、交流の場となった。卒園、転園した親子が戻ってくる場として定着してきている。引き続き定例開催していきたい。</p> <p>○国内外の保育園幼稚園保育者養成大学からの視察を受け入れ、積極的に意見交流を行った。</p>	
	7. 情報	<p>○個人情報、経理関係のデータ流出がないよう保管方法を工夫している。今後も危機感をもって扱うことを徹底する。</p> <p>○附属学校課に協力いただき、HPの内容を更新中。保育内容についてのページは、ほぼ改修を終えることができた。その他(利用申し込みの手順など)の箇所も、見やすい、伝わりやすいホームページを目指し改修していく。</p> <p>○今後も個人情報の管理、保育写真の管理を徹底する。</p>	
	8. 保護者との連携	<p>○10月と3月の土曜日に親子で遊ぼう会を実施した。年2回の保護者会も回数を分け、時間帯を複数用意したが、仕事をしている家庭にとっては、保育時間内に実施することが参加しづらい面もある。一方で土曜開催にすると、近隣以外の家庭にとっては負担が増すことへの懸念もある。どのような形で保護者同士が交流する機会をもつことが望ましいか保護者の意見も聞きながら柔軟な運営を今後も検討していきたい。</p> <p>○個人別のポートフォリオを作成、月ごとに更新し、保護者に手渡した。保護者からのコメント欄があり、そこに記入して返却してもらっている。「多目的室ひだまり」でのいずみカフェも2年目となり、定着してきた。今年は絵本の紹介の他、「子どもたちの好きなこと」をテーマに大きな写真を掲示し、送迎時に自由に閲覧しコメントや感想を書いてもらう試みをした。</p> <p>○日々の送迎時の直接のやりとりを丁寧にまた十分に行うよう心掛けた。今後も、保護者が気兼ねなく相談等もちかけられるような体制を継続すると共に、日常的に保育を伝え、子ども理解と信頼関係を築くよう努める。</p>	
B 大学 の 附 属 学 校 園 と し て	I 大 学 と の 連 携	1. 連携研究	<p>○昨年インターンシップをした本学学生がボランティアとして継続する中で、参与的観察を通した卒論研究調査の他、和洋女子大学の学生によるおもちゃに関する卒論研究調査のための保育観察及びインタビューに協力した。今年度より本学准教授辻谷真知子先生の「園での自然活動等に関する調査研究」についても研究協力をさせていただき、ナーサリーにとっても大変学びが深い貴重な機会となっている。</p>
		2. 連携企画	<p>○年1回の保育所専門委員会において、大学との意見交換を行った。学内乳幼児保育の場であるいずみナーサリーの存在、子どもの存在を大学内に伝え共有する手立てを考えていきたい。学内周知のため、掲示板にポスターを貼ったり、お茶メールで情報発信しているが、その他の手段も模索していく。(パンフレットを置くなど)</p>
		3. 授業交流	<p>○『栄養カウンセリング論演習』の授業で3歳未満児の発達や生活について講話を行った。履修生による保育参観も今年度も実施した。実際の子ども姿を見ることができるとは学生にとってもよかったです。また授業後の課題制作では小さい子がいる家庭向けの簡単にできるレシピを作成してもらい、保護者にも好評であった。</p> <p>○『子ども学フィールドワーク』で学部生の観察を受け入れ、観察後には振り返りを行い、振り返りの会にも参加した。</p>
		4. インターンシップ・ボランティア	<p>○子ども学コース、生活社会科学講座各1名のインターンシップを受け入れた。</p> <p>○学生サークルOchasによるボランティアを再開した。週に1回のおやつ作りも軌道に乗り、子どもにとっても学生にとってもよい機会となっている。新しいおやつメニューの企画にも積極的に、新たに取り入れて定着したメニューもある。今後も安全面には十分気を付けながら、学生がやりがいを感じることができるよりよいボランティア活動の在り方を探っていく。また、同時に学生の活動を保護者に伝える方途を探っていく。学部生、博士課程の学生ボランティアも定期的に継続して来てくれている。</p>
		5. その他	<p>○ダイバーシティ推進担当との協働により、2017年度から継続して休日の通常授業開講日に臨時保育室としてナーサリーを開室した。大学・大学院オープンキャンパスや共通テストなどの時に臨時保育室を開室した。普段は居住地域の保育園に預けている学内関係者が、我が子を働く場所に連れてくる意義を感じられると共に、複数回利用する中で子どもも大人も安心して預けて下さっているようである。小さな子がいる教職員にとって、子どもを預ける以外に、学内保育施設があつてよかったと思っただけのような子育て支援のありかたについても考えていきたい。</p>
II 社 会 貢 献	6. 見学者の受入	<p>○大学の先生経由での見学希望があつた。直営の大学内保育所、利用日数選択型保育所として今後も積極的に見学を受け入れ大学直営保育所の良さを発信していきたい。こども園に見学に来た方が併せてナーサリーを見学する機会が複数回あつた。お茶の水女子大学こども園の先生がナーサリーも併せて紹介してくださることもありがたい。</p>	
	7. 他機関との連携	<p>○国立大学関連社会福祉法人理事長園長会は徳島県での開催で、徳島大学あゆみの森保育園主催で対面による状況報告、意見交換、交流を行った。</p>	
III 地 域 貢 献	8. 地域貢献	<p>○附属幼稚園、こども園との合同で子育て応援プロジェクトのびのび子育てサロンを年に2回(9月・12月)実施した。</p> <p>○地域親子向けの子育てひろば「いずみナーサリーで遊ぼう会」(2018年度に不定期に開催開始、2019年度は定期開催。2020年～2022年休止)は2023年度より月に1回のペースで継続している。1回5組までの小規模な会であるが、一度参加した親子がリピーターになってくださることも多い。子育てに関する相談を受けたり、当日参加できずとも、メールでの相談を受けることもあり、微力ながら、地域貢献につながっている。また外部からの入園問い合わせ等での見学时に育児相談になることも多かつた。保育時間等の条件で直接利用にはつながらないが、何か困ったときに聞ける場所の1つとして機能しているところはある。引き続き、地域の子育て支援についてよりよいあり方を模索していく。</p>	

令和7年度 いずみナーサリー評価(自己評価)まとめ (課題)

<保育課程>

- 子どもの姿や保育を振り返り、クラスを越えて保育士が連携をすることで柔軟な保育を展開することができた。
- 乳児保育の独自性(高い個性、成長著しい時期のため理解の固定化が不可能)と集団生活の中で育つ意義の両義性を発揮できた。
- 今後も子どもの姿に応じた利用日数選択型の柔軟なかつ安定的な異年齢保育を目指す。

<安全・環境>

- 災害時の想定に様々な場所、時間帯を設定し、訓練することで安全な避難の仕方や必要な物を確認した。
- 遊び場、生活の場の整備、食事提供の仕方、アレルギー食の配慮、感染症予防等、安全の徹底を図った。
- 感染症予防のため、入室時の手洗い、施設内の換気、消毒、玩具・教材の殺菌消毒を徹底した。子どもは感染症にかかりながら丈夫になる。神経質になりすぎず、かつ正しく恐れ、乳児期の健康について保護者と共有していく。

<大学との連携・研究>

- 人間社会科学科子ども学コース、食物栄養学科の授業への関与、連携は定着してきている。子ども学コースの学生は2年次後期のフィールドワーク実習で初めてナーサリーの存在を知る学生も多い。ナーサリーは女子大学の中にある学生・教職員のための保育施設であり、学生の今後のライフワークにも関わりが及ぼる施設として、周知方法等も含め、大学の先生方とも連携をとりながら考えていきたい。
- お茶大子どもフォーラムに参加予定(3月1日)。学内外の研究者・保育者が共に学び合う貴重な機会を大事にしていきたい。

<他機関との連携・研究>

- 国立大学法人関連保育所理事長園長会の年次大会はオンライン会議およびメール・電話でのやりとりをすることで情報交換・交流を続けることができた。他大学の保育施設への見学・視察も実施していきたい。